
LOVE GAME

KNT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE GAME

【Nコード】

N2231C

【作者名】

KNT

【あらすじ】

男と女（と男）の駆け引きゲーム。男の視線で、ナンパの心理と駆け引きを描きました。ちょっと大げさだったりする部分もありますが、細部にリアリティを持たせるように注意しました。

1. Search A Target

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺は、真夏の日差しが照りつける沖縄のビーチにいた。

「最高だぜ」

静かに波を立てる青い海を見つめて、英二が囁いた。

「ああ。海、天気、そして時間帯。言うことなしだ」
そして、適度な人の混み具合も。

俺は、すばやく状況を観察した。

男女比率は、ほぼ50:50、悪くねえ。

年齢層も高校生から20代前半と若いようだ。

何より、カップルが少ないのがいい。

「英二、パトロールだ」

俺はブルーのサングラスをかけながら言った。

「わかりました。祐希さん」

英二もオレンジのサングラスをかけ、髪を整える。

ビーチを少し歩くと、大学生くらいの男三人組が、女二人組に声をかけているのを見つけた。

女は二人ともボードを持っている。

「ねえねえ、君たちなにしてんの？地元の子？おれら東京から来たんだけどさ、ちょっとあつちで話そうよ」

日に焼けた良い体をしている男が声をかけるが、女達はうつとうしそくに顔をそむけるだけだ。

「フツ。ド素人が」

英二が勝ち誇ったように笑う。

「ああ。ド素人だ」

女二人。ボードを持っている。すなわち地元のサーファーだ。サーファーを落とせるとすれば、それはサーファーだけだ。

彼女たちは、県外の観光者などに興味はない。

これだから、ビギナーは困る。

ナンパは声をかける前に、勝負の八割がついている。

はつきりいつて、今日のこのシチュエーションでゲットできないなら、性転換したほうが良いぜ。

俺はあたりを見回した。

今日のターゲットは、二人組で十八歳以上、高校生はだめだ。日焼けしていないこと。そして、遠征であることを考えると、やはりレベルAを、悪くてもB+を狙いたい。

俺は英二にターゲットを伝える。

「英二、十八以上で色白、レベルAだ」

英二が驚いた顔で振り向いた。

「十八以上で色白？なんでですか？高校生のほうが簡単だし、焼けてるほうが遊んでそうで手っ取り早そうじゃないですか」

「バカヤロウ！よく考えろ、今日の俺達の狙いは何だ？」

「ええっと…、バカンスで浮かれてる旅行にきている女です。ああ、っ、そ、そうか！」

やっと気づいたようだ。

「わかりましたよ祐希さん！高校生二人だと、旅行者ではなく地元の可能性が高い。焼けてる子もそうだ！」

「フツ、その通りだ。そしてもう一つ、まだ焼けてない女は沖縄入りしたばかり、すなわち、まだツバがついてなく、時間もたっぷりある可能性が高い」

「な、なるほど！さ、さすが祐希さんだぜ」

しかし、英二もなかなか鋭くなってきた。この調子なら、近々単独ミッションに出してもいいだろう。

今日はテストも兼ねて、英二にアプローチをさせてもいいかもしれない。

いや、今日はダメだ。失敗は許されねえ。

苦勞して仕事休み取って、わざわざ沖縄まで来たんだ。必ずレベルAをゲットしないと。

そのとき英二が声を上げた。

「祐希さん！ターゲット発見だ！あそこの二人！」

俺はすばやくサングラスを取り、英二の指差す方向を見た。

女二人組、両方推定二十歳。色もホワイトだ。

さらに俺は目を凝らした。

黄色いビキニのほうに、レンタルのビーチボールを抱えている。

ビンゴだ！地元の女はビーチボールなんて借りねえ！

落ち着け、速やかにレベル判定をしなくては。

黄色いビキニは、ここからじゃ斜め後ろになって、顔が見えない。

隣のピンクのビキニのほうも、下を向いててよく見えない。

俺は緊張しながら、二人が顔を向けるのを待った。

二人とも適度な細身で、スタイルは問題ねえ。

それに、黄色のほうはDくらいあるだろうか、素晴らしい胸だ。

しかし、油断は出来ない。

後ろから見るとレベルA、そのままよく確認もせず声かけて、顔見て自爆ってのは、ビギナーがよくかかるトラップだからだ。

「英二、条件はクリアだ。あとはレベルだぜ…」

俺達は微動だにせず、その瞬間を待った。
上げる、顔を上げるんだ…。

そして遂に、その瞬間が訪れた。

俺は拳を握ってつぶやいた。

「やったぜ英二、ありゃレベルAだぜ」

髪をかきあげながら顔を上げたピンクは、締まった顔のビューティ
フェイサー（美人）だった！

「は、は、はい、レベルAです！い、い、い、いきましよう祐希さん！早くしねえと他のやつらに持ってかれちゃうぜ！」

いかん、こいつ興奮して我を忘れてやがる。

「まあ待て英二、落ち着くんだ。いいか、もう一人のほうの問題だ。
黄色いビキニの方のレベルによって、俺達の作戦も変わる。

黄色もハイレベルなら共同作戦、普通レベルならジャンケン、キラ
ーフェイサー（ブス）ならバトルか、ターゲット変更だ」

「な、なるほど。す、すみません、俺としたことが」

そのとき、黄色ビキニの女が、後ろを指差しながら振り向いた。
俺は声を失った。

「ゆ、祐希さん…あれ…」

英二が呆然と黄色ビキニを見つめる。

「ああ。英二・・・」

俺も、不覚にも目を奪われてしまった。

黄色のビキニはレベルS、いわゆるカリスマフェイサー（芸能人級）だったのだ。

まるで、アヴリルラヴィーンを日本人にしたような整った小顔と、若き日の藤原紀香を彷彿とさせるボディ。

しかも、その連れもレベルAのビューティフェイサーときている。これ以上のターゲットはねえ。

緊張が走る。

「祐希さん、あれ行くんですか？無理だ、レベルが高すぎるぜ……」
英二が弱気を口走る。

「ビビンじゃねえ！沖縄まで来たんだぜ？あれくらいオトさねえと来た甲斐がねえだろ」

「で、でも、あれ、男いないわけねえよ」

「そんなことは関係ねえ。行くぞ英二」

「いや、無理だよ、祐希さん」

チツ、ビビリやがって。こいつを連れていくと足手まといかも知れん。

俺が一人で行ったほうがいいな。

「よし英二、俺が行ってくるから、おまえはここで待ってる。合図するまではこっち来るんじゃねえぞ」

「ゆ、祐希さん……」

そして俺は、チャンスを待った。
髪を整え、手の汗を砂で拭いた。

こんなミッションは久しぶりだぜ。

二十歳（推定）のSとAのコンビ、舞台は沖縄バケーション。
これ以上の舞台はねえ！

必ず決めてやるぜ。

英二には悪いが、おれはSの決め打ちだ。ビビったあいつが悪い。
残り物でもレベルAなんだから、悪くはないだろう。

そのとき、ピンクビキニが立ち上がった。

手に財布らしきものを持ってゆつくりと歩き出した。

俺はすばやくその方向に視線を走らせた。

…かき氷屋だ。

俺の頭は計算を始める。

そうか、さっき黄色ビキニが指差したのは、かき氷屋だ。

そしてピンクがかき氷の買出し、黄色が荷物番だ。

かき氷屋までは、そこその距離がある。しかも歩きにくい砂浜だ。
かき氷屋までの時間と、かき氷を注文し、受け取る時間と、さらに
戻ってくる時間を見積る。

ざっと三分はあるだろう。

よし、今しかねえ！

「行ってくるぜ」

俺は英二にいうと、返事を待たず黄色ビキニ目指してまっすぐ進んだ。

近づくにつれ、黄色ビキニの顔立ちがはっきりしてくる。

…マジでスーパークラスだぜ。

大きな目を細め、海を見ている顔は一般ピープルとは思えない。

センスのいいビキニをつけたカラダも、パーフェクトだ。
俺の脳内CPUがすばやく数値をはじき出す。推定88D - 58 -
88。

これをオトせれば、間違いなく俺の歴史のページになる。歴史の証人は英二だ。

さらに歩きながら観察すると、右手薬指にリング。

…び、微妙だぜ！

薬指。だが右手。ブルガリ。

わからねえ！男がいるのか？それとも自分で買ったのか？

男がいても構わない。興味もねえ。しかし、ミッション成功率は大きく変わる。

疑問が緊張感を一層増幅させる。

到着まであと五秒。

わからねえことは忘れる。ベストを尽くすだけだ。落ち着くんだ。俺はそう言い聞かせて大きく一息をついた。

黄色ビキニの横に、適度な距離を置いて腰を下ろす。

「ねえ、ちょっといいかな。聞きたいことがあるんだけど」

今日一日で、何回も声をかけられているんだろっ。

黄色ビキニは、ちらっと見て、うんざりしたように目をそらす。

…残り二分三十秒。

「ちょっと待つてよ。これ、ナンパじゃないからね。
あそこにいるやつ、英二っていうんだけど、あいつがさ、君の連れ
の子の元カレなんだってさ。
あっちに行つたピンクの水着の子、君の友達でしょ？」

…どうだ？どう出る？

「マジ？」

…よし。

「らしいよ。俺は知らないんだけどね。何かね、今でもすごく好き
らしいよ。

確かにメチャクチャかわいいよね。俺も聞いてビックリしたよ！
お前、あんなにカワイイ子と付き合ってたの？って。

モデルみたいだもんな。ホント、メチャクチャカワイイよ」

「うーん、あたしも知らないよ。あの子、もうすぐ戻ってくるけど
？」

「英二のこと、嫌がらなけりゃいいけど。
あいつ話したいみたいなんだよ。あの子、このあと時間ないかな？」

「別に…予定とかはないと思うよ」

…来た！オツケー！予定なし！

「ならいいけど…。でもさ、あの子もすごいけど、君もすごいね」

「…なにが？」

「いや、二人揃ってカワイすぎない？普通じゃないよ。このビーチで一番と二番だ。

何かの集まり？ひょっとしてモデルなんか？仕事で来てんの？」

「違うよ。ただの旅行だよ」

黄色ビキニがほんのちよつと、口の端だけで笑いながら答えた。

…よし！よし！よし！旅行だつて！

振り向くと、ピンク水着は、かき氷ができるのを待っている。

まだ時間はある。

「へえ、そうなの？ふうん…。…ねえ、ちよつと…聞いていい？」

黄色ビキニは返事はしなかったが、こつちを向き、すこし顔を傾けた。

まだ警戒してるようだが、反応は悪くねえ。

あと一分。

「君らすつごいカワイイし俺じゃ役不足っぽいから、ナンパしようとかは、全然思わないんだけどね。

でも、…もし時間余ってるなら、…ちよつとだけ話させてくれない？予定あるなら全然いいし、旅行の邪魔するつもりはないんだけど、こんだけカワイイ子だし、…ちよつとでも話しか出来たら、…メ

チャクチャうれしいんだけど……」

俺は黄色ビキニの目をまっすぐ見て、少し口ごもりながら言った。

「え……」黄色ビキニはまごついた。

……ここまでは完璧だ。

この黄色ビキニにとって、すんなり「いいよ」とも言いづらく、英二とピンクビキニが関係あるとすれば、無下に「いやだ」とも言えない、微妙な俺のリクエスト。

返答に困るのは計算通りだ。

下手に出てると見せかけて、実は、ペースは俺にある。

あと三十秒くらいか？一気に勝負だ。

「お願い！だって俺らも旅行だから、もう二度と会えないしさ。

俺も普通ならこんなこと言わないんだけど、こんなカワイイ子にもう二度と会えないと思ったら、あとで後悔すんのが嫌なんだよ。

俺だって、カワイイ子と話して、一緒に写真撮ったりしたいんだよ！

ね？お願い！ちよつとだけ！あつそうだ、晩ごはん、何でも好きなものおごるよ！

だから、ね？お願い！」

……ど、どうだ？いけるだろう！

黄色ビキニは、まだ困惑した顔をしている。

俺はファーストステップのフィニッシュにかかった。

真っ直ぐに目を見て、両手について身を乗り出した。

「ね？お願い！」

黄色ビキニは、表情はそのまま、ゆっくり小さく頷いた。

…ふう。ギリギリだぜ。

ピンクビキニを見ると、両手にかき氷を持って戻ってきている途中だ。

こっちを見ている。

…仕上げだ。

「ホント！？やった〜！ありがとう！」

俺は黄色ビキニの手を両手で取り、大袈裟に振った。
ピンクのビキニのベイビー、よく見てくれよ。
もう商談は成立したぜ。

「ありがとう、マジでうれしいよ！
じゃあちよつと、あいつのところ行ってくるわ。あの子にも、話
しといてくれる？」

「うん…」

黄色ビキニが答える。

「じゃあ、ちよつと待っててね！」

そういつて、俺は英二のほうに戻っていった。時計を見るとジャスト三分。

三歩歩いて、立ち止まる。

「あつ、そうだ」

振り向いて俺は言った

「俺、祐希。君、名前なんて言うの?」

黄色ビキニが答える。

「のりこ」

…のりこか。名前は普通だな。

「わかった!じゃ、のりこちゃん、ちょっと待っててね!」

ふう。

これがプロの業ってやつだぜ。

2・Lock On

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「祐希さん…」英二は不安そうな表情で、俺を迎えた。

「英二、タバコくれ」

祐希はタバコに火をつけて、大きく息をついた。

「英二、こっから勝負だ。お前がヘタ打ったらぶち壊した」

「えっ、ということは祐希さん…、ゲットですか?」

「いや、まだだ。かなり強引な持っていき方したからな。確定じゃねえ。

いいか英二。今から三十秒で説明する。

一回しか言わねえから、よく聞け」

「…わかったか？」

「任せて下さい！」英二がうなずく。

「よし、じゃあ行くぞ」

俺と英二は、再び二人目指して歩き出した。

ピンクと黄色は、かき氷を手に関か話している。
時計を見た。

三時三十分。

「のりこちゃん、ゴメン！」

俺は、少し離れたところから、大きな声で言った。

「英二の見間違いだっみたい。

やっぱ、俺もこいつにこんなカワイイ彼女、おかしいと思ったんだよ」

俺は、二人の側に腰を下ろしながら、ピンクビキニに言う。

「ゴメンね。びっくりした？間違いだったわ。
ってか、そんなことより、近くで見たらホントカワイイな。俺ら、
仕事休みとってこっち来てんだけど、のりこちゃんたちは学生？」

「うん」のりが答えた。

「そうなんだ！ひょっとして関東？意外と、同じ県だったりするんじゃない？」

「あたしたちは東京だよ。祐希くんたちは？」

…オーケーだ！

実は、今は大きな賭けだった。

祐希くんたちは？と、質問が返ってこなかったら、かなり苦しい展開になっていた。

しかも、“祐希くん”と、こっちの名前を呼んでくれたのもポイントが高い。

思ったよりも、いい流れのようだ。

「おお、一緒に！俺らも横浜だよ！奇遇だな〜！」
俺は最高潮のテンションで答えた。

「ハハハ、横浜と東京のどこが一緒なのよ」

…イエス！ツツコミも来た。のりこのほうは完璧だ。
あとは、ピンクビキニを何とか乗せられれば…。

「いやいやいや、似たようなもんじゃん？関東だし。ね？」
ピンクビキニに会話を振ってみる。

「アハ…」愛想笑いだ。

「っていうかさ、君もこんなやつ知らないよね？こいつ君のこと、前のオンナとか言ってたよ？どうなのこれ？」

英二を指差しながら、さらにピンクビキニに振る。

「え…」笑ってはいるが、まだ俺らの懐には入ってこない。
…来い、来るんだ。

「図々しいんだよお前！バカ！」英二の頭を軽く叩く。

「いてて。いや、あの子が彼女だったらいいな、みたいな願望も…」

「何言ってるだよ、失礼なんだよ！ほら、この子メツチャ怒ってるじゃん」

「えっ、怒ってるの？ゴメン」英二がピンクビキニに顔を向けて言う。

「アハハ、怒ってないよ怒ってないよ」ピンクビキニが言った。

…よし！

「ホント？いやあ、顔がカワイイだけじゃなくてココロも優しいね！ステキ！この完璧女！」

肘でピンクビキニをつついてみた。さあ来い！

「アハハ、そんなことないって。…実は内心ブチギレだし！」

「英二、やっぱ怒ってるよオイ！」

「ハハ、ウソウソ。全然怒ってないよ」ピンクが口を開けて笑った。

…ふう。一段落だ。

「アハハ、君ら面白いね！俺、祐希。こっちは英二。君は名前なんて言うの？」

「ゆうき！」ピンクビキニが答えた。

「アハハ、だから、それ俺だって！」

…ピンクのぼうが、ノリがいいようだ。

これはいけるぜ！沖縄ブラボー！

これが噂に聞くバカンス現象ってやつか。

たった一発のアタックで、レベルSとAをゲットかよ！

「あたしもゆうきだよ！」ピンクがいった。

「マジで！？ひよっとして俺と家族？」

「いや、家族は名字だから」

「ハハ、そっか。ゆうきちゃんてどんな字書くの？」

…ツイてる！ノってるぜ！

思わぬところで、話題がわくじゃねえか！

運も俺に味方しているようだ。

「あたしはねえ、ひらがななんだよね」

「へえ、そうなんだ。名前までカワイイんだから、もう!」

…そろそろいいだろう。

「ね、ね。じゃあさ、さつき約束したとおり、なんか好きなものおごっちゃうからさ。もうすぐ夕方だし、海あがない?」

…ここだ、英二!

…さつき打ち合わせたのは、ここだ。

(いいか、女は食べ物に弱い。旅先で、そこが有名な店ならなおさらだ。

超有名な沖縄名物の店を知ってるから、そこに行こうって誘うんだ)

「あつ!じゃあ俺いいとこ知ってますよ」

…ナイス!さすがだ!タイミングバッチリだ!

「なんかね、沖縄で一番有名なお好み焼き屋らしくて、プロ野球選手もいつもキャンプのときに寄るそうだよ」

…バカかテメー！お好み焼き？沖縄名物でもなんでもねえだろうが！
プロ野球選手？キャンプ？二十歳の女が興味あるわけねえんだよ！

「ホントかよ、英二！」

俺は怒りに震えながらも、かろつじて相づちを打った。
チラリと女を見る。

…ノー！

やっぱり！顔を見合わせて、いかにも行きたくなさそうだ！

「で、で、でもさ、こんだけ暑いしさ、お好み焼きはちょっと
な〜。

俺が地元の人に教えてもらった超有名な沖縄料理屋が近いらしいか
ら、そこ行こうよ」

二人は顔を見合わせている。

…ここで黙って返事を待つのはド素人だ。そんな弱腰じゃいつまで
たってもビギナーだぜ。

こういうときはノリのいいほう一人に絞って、そいつにうんと言わ
せるのが正解だ。

英二、よく見てろよ。

俺は、体ごとゆうきの方へ向け、最高級のテンションでデタラメを
並べ立てた。

「ねえ、ゆうきちゃん知ってる？

こちらへんにある超有名な沖縄料理屋！

こないだも、テレビでキムタクが行ってた店だよ。

沖縄料理ってクセがあるから、旨いかまずいかは、人によって食ってみないとわかんないんだけど、ツボにはまったら沖縄に住みたくなくなるくらいハマるらしいよ。

沖縄の芸能人の何とかって子のお母さんもそうだったらしいね！

まあ、口に合わないかもしれないけど、沖縄に来て沖縄料理食わないってのもヤバイよね？

もちろん、君らも食べるつもりだったでしょ？

あつても、おいしいとこってメチャクチャ高いらしいよね。

場所によっては、一人十萬くらいかかるんだって。

そんなのフラフラ適当に入れないじゃんね！

あつそうだ！

もし、ゆうきちゃんたちも沖縄料理まだだったら、そのおいしい店いこつか？

ゆうきちゃんたちも、どうせ食べるつもりでしょ？」

…ど、どうだ？何とでも言ってきやがれ。必ず説き伏せてやる。

「えゝそうなんだゝ。あたしそこいってみたい。ね、のりこ？」

…よし！

「オツケーオツケー！じゃあ、そこいこ！

じゃあねえ、今、四時前だからシャワー浴びて着替えてゝ、…五時に待ち合わせよっか」

のりこの返事を聞く前に、強引にゆうきにもう一度振る。ブーメラン話法というテクだ。

「うん！わかったよ。じゃあ、携帯番号おしえとくよ。いい？090の…」

そして俺達は、彼女たちのホテル前に五時という約束で、一旦別れた。

…い、いただきだ！

俺は心の中でガッツポーズをしながら、歩いた。

「ゆ、祐希さん、すげえよ！さすがだぜ！あの二人メチャクチャカワイイぜ！」

「フッ、おちつけ英二。ここからだ。夜は長いぜ」

俺は、己のクレバーなトークと、歴史に残る夜の予感に酔いしれた。

いま、四時ちょうど。

熱いシャワーをゆっくり浴びながら、とびきりの作戦をひねり出そう。

おっと、その前に。

俺は、信号待ちをしている年配の女性に話しかけた。

「ねえおばちゃん。ここに適当な沖縄料理屋ってないかな？」

3・Game Of Kings

- - - - -
- - - - -
- - - - -

この店をチョイスしたのは正解だったぜ。

有名店に予約の電話したら満員だったから、ホテルの人に聞いた穴場にいこう、というこじつけで、この店に来た。

座敷になっている個室の、奥の席に俺。隣には、もちろんのりこ。テーブルの幅が狭いから、密着度は高い。

シャンプーの香りとノースリーブからのぞく白い肌が、俺のモチベーションをますます高める。

出来ることなら浴びるほど飲んで、ますますテンションを上げたいところだが、残念ながら、俺は酒が飲めねえ。前を見ると、英二とゆうきが座っている。入店して三十分。

すでに酔っ払っている英二は、ゆうきの肩をがっちり抱いている。ゆうきもまんざらではなさそうだ。

普通なら、ターゲットより先に酔っ払うなんて、ド素人もいいところだが…。

まあ、結果オーライだ。

それよりも、そっちでたらふく飲んで出来上がったもらったほうが、こっちもやりやすい。

「じゃあここで、王様ゲーム〜！いえ〜い！」
突如英二が言った。

な、な、何言つてやがる！王様ゲームは悪くないが、まだ早すぎる！
こりゃヤバイぜ。女がひいたら厄介だ。
俺は隣ののりこを見た。

やっぱり！

かろうじて口は笑っているものの、顔全体が微妙に引きつっている。
やっぱりまだ早かったぜ、英二。何とかしねえと…。

「王様ゲーム、いえゝい」ゆうきの声が大きく響いた。
な、なんだと！

前を向き直すと、ゆうきが満面の笑みで手を叩いている。

…い、いけるのか？

俺は賭けに出た。ここで王様ゲームに持ち込むことができれば、ム
リヤリ飲ませることができる。そう、女を酔わせるってのは、ミッ
ション成功には欠かせない要素だ。

「い、いえゝゝい、王様ゲームゝ。ぱちぱちぱち」
俺も手をたたいた。これで三対一だ。

のりこがよほど強烈に拒否らない限り、王様ゲームになだれ込める。
さらに俺は手をたたく。

ぱちぱちぱち…。

控えめにのりこが手をたたいた。

…ナイス英二！よくやった！

サッカーでいえば、開始直後に超ロングシュートを決めたようなものだ！

このあとのペースは、完全に俺らのものだぜ！

俺は、割り箸でクジを作る英二を、愛しい目で見ていた。
大きくなりやがって…。

「クジできたよ」

すでに目がすわっている英二がいうと、ゆうきがまた手を叩く。

…よかったじゃねえか、英二。その女、間違いなくいただきだ。 1
00パーだ。

「よし、じゃあクジひきな」

英二がのりこに割り箸を差し出す。

のりこは遠慮がちにクジをひいた。

どうやら、のりこはまだノリきれてないようだ。

でも、王様ゲームに持ち込めば問題ねえ。

ムリヤリ一気でもさせればこっちのもんだ。

クジをひいたのりこの反応は、どうやら王様ではないらしい。

次は俺だ…。

俺は手を伸ばしながら、英二の目を見つめ、アイコンタクトを取る。

（おれとおまえのどっちかが王様になればいい。まずは飲ませまくって、全員が出来上がってしまうことだ。基本に忠実に、まず王様は、一気を命令だ）

英二も俺の目を見て、軽くうなずく。
俺のくじは三番だった。

次にゆうき。

思いがけず、こいつが素晴らしい働きをしている。

ゆうきもレベルAだから、かなりかわいいほうなのだが、すごい
ノリがいい。

それとも、これもバカンス効果か？

「あゝ残念」ゆうきは、あからさまにいった。王様ではないよう
だ。

ということは…。

英二が残ったクジを見る。

「やった〜！俺、王様〜」

…でかした英二！でかした！

よし、のりこに泡盛をグラス特盛で一気だ！まあ、ゆうきにさらに
飲ませるのもいい。

とにかく大成功だ！

「よし、じゃあね〜」

英二が俺を見る。

俺は、ゆつくりとまばたきを三回。三番の合図だ。
英二がうなずく。

「じゃあ一発目！一番の人が…」

英二がいうと、ゆうきが英二を見て身構えた。

…そうか。ゆうき、お前が一番か。
フツ、悪いが特盛ストリート泡盛一気で、さらに盛り上げてもら
うぜ。

「一番の人がパンツ一丁!」

な、な、なに言ってやがる英二!
テメー正気か?

なんで一発目から脱ぎなんだ!
しかもパンツ一丁ということはブラジャーもかよ!
それはムチャだぜ英二!

フォローだ!なんちゃって〜とか言って、フォローするんだ!

「パンツ一丁、いえ〜い、ぱちぱち」と英二。

こ、こいつ、本気で言ってやがる!

「え〜〜。脱ぐのはかわいそう〜」
遂に、のりこが口を開く。

…ほら見る!ひいたじゃねえか!

どうやって引き戻す?英二には任せてらんねえ!
俺が、俺が何とかしねえと!

「え〜、一番てあたしだよ〜。脱ぐの〜?」

…な、なんだと！？ゆうき、テメーまんざらでもねえじゃねえか！

「ぬげ、ぬげ、ぬげ」英二が一人ではやしたてる。

「ん、しょうがないなあ」

…ま、マジかよ！いいのか？

俺は、たちあがったゆうきの目をよく見た。

顔色はまったく変わってないが、目が半分閉じている。

そうか、こいつ、顔には出ないが酒弱いんだ！すでにかなり酔ってるんだな？

ならここは、脱がしてしまったほうが、場に勢いがつく！
幸い個室は障子で区切られている。

「ぬげ、ぬげ」俺も英二に合わせて声を出した。

「じゃあ脱ぎます！」ゆうきが手を挙げて言った。
歓声を上げる俺と英二。

手拍子にのって、ゆうきが水色のキャミソールに手をかけ、一気に持ち上げた。

「いえ、いえ、いえ！」ゆうきのブルーのブラジャーに、俺達は大フィーバーだ。

ゆうきものりこに劣らず、いいカラダをしている。

「つぎ！つぎ！」早く下も脱げと、英二が手をたたく。

ゆうきは次に、白いすねまでの丈のパンツに手をかけた。

そして今度はゆっくりと、パンツを下ろす。

…ブ、ブラボー！

ブラとお揃いの濃いブルーのパンツは、なんとTバックだ！

これは、勝負下着と見ていい！

…こいつ100パーだ！間違いなく100パーだ！よかったな英二！
俺は英二のミッション成功を確信し、英二に喜びの視線を送った。

「ブーラも、ブーラも！」英二は攻撃の手をゆるめない。

「いえーい、ブーラも！」俺も加勢する。

「もー。わかったよー」ゆうきは両手を背中に回した。

時計を見るとまだ六時。

一時間もしないうちに、もうマッパかよ！沖縄最高だぜ！

そして、ゆうきが右手で胸を隠しながら、左手で外したブラジャーを高く上げた。

「はーい、脱いだよー！」

右手で隠し切れず、右の乳首がはみ出ている。

巨乳にありがちな、色素の薄い大き目の乳輪だ。

俺達は彼女に、ありったけの拍手を惜しみなく贈った。

…ここまで来れば楽勝だ。

女のうち、一人でも脱いでしまえば、一気させられるくらいのこと

には、全く抵抗がなくなる。

それに、脱ぐことにより、ミッションの最終段階ベッドインの抵抗も軽くなる。

よって、王様ゲーム一発目でゆうきに乳まで出させたのは、サッカーでいえば、前半戦ですでにハットトリックを決めたくらいの価値があるといつていいだろう。

…英二も成長したもんだぜ。

俺は、まぶしく見える英二を見た。

「王様ゲーム二回戦目、いえ〜い」英二がすかさず盛り上げる。

…フツ、まったく頼もしいやつだぜ。

今度はゆうきからクジをひく。

「あゝあ」ゆうきがいう。全く分かりやすいやつだ。ゆうきのクジは、王様じゃねえ。

次に俺。

一番手前の割り箸を引こうとすると、クジを握る英二の手が微妙に震えた。

…？

英二の顔を見ると、小さく首を振り、あごでわずかに右を差す。

…英二、お前ってやつは…。

俺は右の割り箸を引いた。

先端に輝く王マーク。

…フツ、英二。お前は大了たやつだ。お前は、王様ゲームのファンタジスタだぜ。

全員が引き終わり、俺は発表した。

「俺が王様だよ〜ん！」

英二は大喜び、なぜかゆうきも大喜びである。

さあ、どう料理する？

「じゃあね〜…」俺は言いながら英二を見た。まばたきを二回。オケー。

「三番が〜」俺は、そう言いながらゆうきを見た。こいつは、わざとかと思うほど分かりやすい反応をする。

しかし、俺が三番といった瞬間、何も反応はなかった。

ということは、三番はビーマスにビンゴ、そう、のりこだ！

さあ、どうする？飲ませるか？脱がせるか？それとも、キスでもしてスキンシップを図るか？

俺の脳内CPUは素晴らしいスピードであらゆる選択肢のシミュレーションを始めた。

この一手は非常に重要だ。

まだのりこの飲みが足りない気がするが、場の勢いからいって後からでも飲ませることはできそうだ。

脱がせるか？

ゆうきが乳までさらしてることからして、飲みが足りないとはいえ、ある程度までは大丈夫なはずだ。

脱ぐことによって、吹っ切らせることもできるかも知れねえ。

それとも王様とキスでいくか？しかもベロチューで。

脱がせるよりも親密度も増すし、このあとの展開にも有利だ。そうだ、それがいい！

三番が王様と抱き合って、ベロチュー六十秒！これがベストだぜ！

と、そのとき…

「三番ってあたしなんだけど、あたしムリだから」

命令する前にのりこが言い放った。

俺は硬直した。

「脱いだりキスとかしたら、彼氏に怒られるし。ムリだから。ちょっとトイレいつてくる」

のりこはそういつて、行ってしまった。

俺は硬直したまま冷や汗を流した。

…や、やべえ！ヤバイ流れだ。

英二は、いまいちこのヤバさが理解できてないようだ。半開きの目で、ただ座っている。

ゆうきは目を閉じ、乳を出したまま英二に寄りかかって、頭を肩に乗せている。
寝てるのか？

俺の脳内CPUは、再度フルスピードで計算を始めた。
コンマ五秒で結論に辿り着いた俺は、英二に声をかけた。

「英二！英二！ちょっとこっちこい！」

「？」

「早く来い！」

英二は、肩に乗っているゆうきの頭をどけ、よろよろとこちらへ回ってきた。

ゆうきは目を開けない。英二もずいぶん酒が回ってるらしい。
どうやら、沖縄の酒は相当に強力なようだ。飲まなくてよかったぜ。

「英二、よく聞け。さっきのりが命令拒否したの、なんでかわかるか？」

英二はすわった目で首を振った。

「彼氏が、とか言ってたが、あれは違う。ウソだ。
さっきあの子が俺に、そつと打ち明けたんだ。

…あの子はお前のことを、相当に気に入ってるぜ。
悔しいが、あのナイスバディのレベルSは、すっかりお前の虜だ。
だから、お前の見てる前で乳出したりキスしたりしたくねえんだ。

わかるか？」

英二は目を大きく見開いた。

「マ、マジですか祐希さん？じ、じゃあ俺がレベルSのほうを頂いても？」

俺はうなずいた。

「ああ。のりこはお前のものだ、英二。

今日のお前の活躍は大したもんだったぜ。サッカーでいえばセリエAクラスだ。

のりこもおまえに抱かれるのを期待してるはずだぜ。さあ、席を替われ」

「す、すみません祐希さん！恩に着るぜ！」

俺はうなずいて、英二にのりこの隣の席を譲った。

…クックック。悪いな英二。その席は地獄席だ！

のりこはムリだ。酔ってもいねえし、男に義理立てもしてやがる。

ルックスは極上のレベルSだが、ヤレなきゃ全く意味がねえ！

プラスチックのバナナを食おうとするサルのように、せいぜい頑張れや！

のりこが戻ってきた。

席が替わっているのも気にせず、座ると同時に、退屈そうにタバコをふかしだした。

…フツ。やはり、全くやる気がねえ。

俺はゆうきの腰に手を回し、こっちに引き寄せた。

ゆうきは、全く抵抗なく俺に寄りかかってくる。

ゆうきの顔を覗いてみる。

目はまだ閉じている。のりこには劣るものの、さすがレベルAだ。ゆうきもモデル級と言ってもいいだろう。

俺は、ゆうきの胸に視線を落とした。

84～85のDくらいだろうか。均整のとれた、いいカラダをしている。

パンツのレース部分から覗く肌が、ますます俺を燃え上がらせる。

「ゆうきちゃん、大丈夫？トイレいく？」

俺は顔を近づけながら耳元で囁いた。

「う…ん…。だいじょぶ。でも、おトイレいきたくい…」

…うふふふ。まずはトイレでジャブといこうか。

「じゃ、一緒に行こうね。立てる？」

俺はゆうきにパンツをはかせ、ノーブラのままキャミソールを着させて、手を取りトイレに向かった。

足元がおぼつかないゆうきの腰を抱えて歩かせ、ようやく女子トイレに入り、個室の鍵をかけた。

俺はすかさず、ゆうきの口に舌をねじ込んだ。

「んっ…」ゆうきが小さく声を上げる。

俺は、中坊時代から氷を使ってテクを鍛えてきたディープキスをお見舞いした。

「んっ…んん…はあ…」

ゆうきの膝が震える。

そして首筋、耳へと下を這わせ、捲り上げられた胸に唇を触れさせた。

「ああ~~~~ん!!! あああ~~~~!!!」

こ、声がでけえ! ムリだ!

俺は慌ててゆうきの服を戻し、女子トイレから連れ出した。

…チツ。これじゃ、ホテル以外はムリそうだぜ。

酔いが覚めないうちに、さっさとホテルに連れていったほうが良さそうだ。

俺がまた四苦八苦して、ゆうきを支えながら座敷に戻ると、信じられない光景が、そこにあった。

のりこが英二にぴったりと寄り添い、顔を向けキスをしている。

英二の手は、のりこのミニスカートから伸びる太股に置かれ、こともあるうに、さわさわと内腿を撫でていた。

ゆうきの乳とは比べ物にならない、のりこの88E（推定）の胸が、英二の胸に押しつけられている

…ど、ど、どうなってやがる! 英二の野郎、どうやってあの女を!

まさかクスリか？いや、まさかそこまではしねえはずだ。第一、英二はそこまで頭が回転する状態じゃねえ。
デタラメで言った、英二のことをお気に入りつてのが案外当たりだったか？

二人は呆然と立つ俺に、気づきもしやがらねえ。

ゆっくりと唇を離し、うつとりとしているのりこの顔をよく見る。
頬は赤らみ、目も充血、目も半開き。どうやら酔っているようだ。

…しかし、さっきまでシラフだったのが、ものの五分でなぜこまで…。

テーブルに目を移すと、のりこの前に、ほとんど空の瓶がある。

…英二の野郎、かなり飲ませたようだな。しかし、どうやって？
あいつだって、ベロベロじゃねえか。一体、どんな手を使いやがったんだ。

4 . W i n n e r I s M e

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺は、隣のゆうきが急に疎ましくなった。

なぜ俺が、声がでかくムードもない、おまけにのりこより乳の小さいレベルAのこの女で、なぜ英二が88E（推定）のレベルSなんだ。

…許せねえ。

俺はゆうきを置いて、トイレに戻った。

男子トイレの個室に入り、携帯電話を取り出し、英二を呼び出す。

プルルルルル……

…早く出やがれ、バカ野郎！

「もしもし？」

「おう、英二か？俺だ。ちょっと困ったことになったぜ。ゆうきちゃんが、クレジットカードなんかを、落としてたらしいんだよ。」

今ホテルに警察の人が届けに来てるらしいから、おまえ、ゆうきちゃん連れて、彼女達のホテルにいつてくれるか？」

「あ？ああ、ホテルね…。でもなんで祐希さんがそれを？」

…生意気にも筋が通らないことに気づきやがった。

「うるせんだよ！急いでんだ、さつさと連れてきやいいんだよ！お前力ネないだろ？ここの支払は俺が払って、のりこちゃん連れて帰るから、さつさと行きやがれ！」

「わ、わかりましたよ」

…プチッ。

…ふう、これでいい。

俺はトイレの入り口から、そつと店内を伺った。
しばらくして、英二とゆうきがふらふらと出ていった。

…そつえばあの女、ちゃんとブラジャーしてんだろうな。まあいい。

二人が店を出るの見計らつて、俺は座敷に戻った。

のりこは一人でさらに泡盛をあおっていた。
にやにやしながら、酒を飲んでる。ご機嫌の様子だ。

…つふふふ。地獄席から天国席にジャンプアップだぜ！

英二、お前にレベルSは百年はええんだよ。

ゆうきはくれてやるから、よろしくやりな。

俺は、のりこの横に腰を下ろした。

「英二とゆうきちゃんいないね？」のりこの酔い具合を確かめよう。

「うん。何かしんないけど、急いで二人で行っちゃった」のりこが答えた。

…絶妙だ！状況は把握できてないが、泥酔とまではいつてないようだ。

「あの二人、ホテルに帰っちゃったらしいよ。俺達もいかなくちや」

「えゝホテル？英二くんとゆうき、エッチいゝ。えへへへ」

「ああ、エッチだねゝ。でも、せつかく旅行来たんだから、楽しむ

のはいいことだと思うよ」「俺はのりこを抱き寄せ、首筋に唇を触れさせながら言った

「…あっ」のりこは声をあげる。よしよし、カラダもいい感じに仕上がりつつあるようだ。

「あの子、彼氏いるのに」。怒られちゃうよ…そんなことしたら…」「何を言ってるやがる。

「いわなきゃ絶対にばれないから、大丈夫だよ。それより旅行を目的に楽しく過ごすほうが重要さ…」

俺はのりこのスカートの中に手を滑りこませた。太股の内側をゆっくりと辿ると、その奥はすでに温度と湿度が上がっている。

パンツのラインに添って指を動かすと、のりこの体が小さく震えた。

「あ…あっ…、ダメ、あたしも彼氏いるし…、こんなの、怒られちゃう」

「そっか、じゃあ二人の内緒にしようね…」

俺はキスでのりこの口をふさぎ、指をパンツの中に忍び込ませた。

「はっ、ああん…」

俺は、その湿り具合を確認し、安心した。

…よし、大丈夫！準備オーケーだ。

ここまでできたら、この女だって欲求を止められやしねえ。

「ちょっと待っててね」軽くキスして、俺はレジにダッシュした。

支払を済ませ、のりこを連れ出すと、一目散にホテルに向かった。

…ふはははは、今度こそ本当にいただきだ！レベルSをな。

のりこは、近くで見ると本当にかわいい。

こんなに整った顔には、今まで出会ったことがねえ。

そして顔だけでなく、88E（推定）のこの乳！この白い肌！細いボディ！

間違いなく、今夜は俺の歴史に残る一夜になるだろう。

…ウフフフフ。

すると、近くで携帯の呼び出し音がした。俺のではない。

「あ」のりこがかばんから携帯を取り出した。

「ゆうきからだ。……もしもし？」

…チツ。

電話が来るということは、もうバレたか？

ぐずぐずしていると英二の野郎が戻ってくるな。

先に俺達のホテルにでも入られると厄介だぜ。

しぶとい野郎だ。

「え？そうなの？あたしの？…うん、…うん。じゃあ今からそっち行くよ」

…なんだと！今から行く？

「ど、ど、どうしたの？」電話を切ったのりこに、平静を装って聞

いた。

「なんかね、落としたカードね、ゆうきのじゃなくてあたしのだったんだって。警察が来てて、取りに行かなきゃいけないみたい。どのカードだろ……」

「な、な、なんだと！俺のデタラメが、のりこにすり替わって現実になったってのか！

ここでホテルに行ったら、英二の野郎も加わって、また一からやり直した。

どうする？奴等と合流するわけにはいかねえ！落ち着け、考えろ！

…そうだ！

俺が一人で行って、のりこは具合が悪いから来られない、あとで本人と取りに行く。

そう言って警察を追い払って、あとはダッシュで英二とゆうきを振り切ろう。

なに、奴等は酔ってる。ダッシュでは、負けやしねえ。

「よし、じゃあ俺が走って取ってくるよ。のりこちゃんお酒入ってるしさ。

俺達のホテルとのりこちゃんのホテルって近所だから、すぐ戻ってくるよ。

俺のホテルのロビーで待っていてくれるかい？」

有無を言わず、ホテルの場所を説明し、俺はダッシュした。

…レベルSは絶対に譲れねえ！レベルSはこの俺がいただく。

俺は高校以来のダッシュを見せ、のりこたちのホテルに駆け込んだ。

…ハア、ハア、ハア。警察はどこだ？

ロビーを見回す。

「どこだ？…いねえ」

ふと、ロビーのソファにだらしく寝そべる女を見つけた。

俺は駆け寄り、揺さぶった。

「ゆうきちゃん！オイ、ゆうき！起きろ！」

ゆうきを揺さぶる。この女、やっぱりノーブラだ。

薄いキヤミで、乳首が思いっきり透けてやがる。

しかしそんなことは、今はどうでもいい。

「オイ！急いでんだよ！警察は？英二はどこだ？」

「…ん？祐希くん？どうしたの？」

「さっき、のりこちゃんに電話したろ？カード取りに来たんだよ。

警察はどこだよ」

「…電話？ん？…あたししてないよ」ゆうきは薄く目を開けて、答えた。

…電話してない？どういうことだ？のりこがウソを？

「あ」ゆうきが口を開いた。

「なんだ？やっぱり電話したのか？」

「そういえばさっき、あたしの携帯で、英二くんがのりこに電話してた」

……！！！！

…そういうことか！！

あの野郎、ハメやがった！

じゃあ、今頃のりこは…！！いや、まだ間に合う！
俺は英二の携帯を鳴らした。

プルルルルル……プルルルルル……

…プチッ。

…ツーツーツー。

「こ、この野郎…！！」

俺は壊れんばかりに携帯を握り締めた。

5 . G a m e I s O v e r

- - - - -

- - - - -

「フツ、あんたが仕掛けたゲームだぜ、祐希さん」

俺にも、ついに祐希さんを越えるときが来たってことだ。

…俺は英二、レベルSの女をゲットした、いま沖縄で一番ツイてる
ナイスガイだ。

のりこの腰を抱き、フロントにいう。

「1215号の鍵をくれ」

フロントのおやじは、のりこの顔をちらちら見ながら鍵を探した。

…フツ、わかるぜ。カワイイだろう、うらやましいだろう、オッサ
ン！

この激マブレベルSは、俺のもんだぜ！

クッククク。

俺は鍵を受け取ると、のりこを連れて部屋に入った。

しっかりと鍵をかけ、二回確認してから中へ入り、のりこをベッド
に寝かせる。

俺は勝利の余韻に浸りながら、のりこの横に腰を下ろし、タバコに
火をつけた。

祐希さんが、のりこに何かしたらしい。のりこは昼間と違ってかわ
って無防備になってる。

いや、むしろ発情してるようだ。

腰をクネクネ、息はハアハア、カラダをベタベタと俺にくっつけて、

俺を誘っている。

まだ酔いは覚めてないようで、目はまともに開いていない。

のりこのミニスカートは捲くりあがり、黒いレースのパンツが露わになっている。

…うふふふ。

俺はタバコをくわえながら、パンツの上から、のりこの股間を人差し指でなぞった。

「…あっ！あはっ…！」

のりこの体が大きく反る。

俺は、濡れた人差し指を見て笑った。

「あははははは！俺の勝ちだぜ、祐希さん！」

プルルルル…プルルルル…。

ん？俺の電話だ。

…祐希さんだ。

もう、やつはこの部屋には入れねえ。鍵もしっかりと、この手でかけた。

俺は少し考えて、通話ボタンを押した。

静かに祐希さんの声が聞こえた。

「俺だ。英二か？」

「はい」

「おまえ、のりこと一緒か？どこにいる？」

「ああ、一緒ですとも。あんたと俺の部屋だ。のりこは股ひらいて俺の隣にいるぜ」

俺はのりこの内股を撫でながら答えた。

「ん…、ああん…」のりこが小さく悶えた。
…俺の勝ちだ、祐希さん。あきらめろ。

「そうか。英二、お前の勝ちだ。レベルSはお前のもんだ」

「ゆ、祐希さん…」

「強くなったな、英二。俺はうれしいぜ。俺はゆっきとダブルゆっきで楽しむさ。
なに、あいつだってかなりカワイイほうだぜ？」

「祐希さん…。あ、ありがとう」祐希さん、あんたって人は…。

「ところで英二、近くにのりこがいるのか？」

「あ、ああ。隣にいるぜ」

「じゃあ、お前ベランダに出られるか？ちょっと、のりこには聞かされたくなえ話だ。」

すぐ終わる話さ。その後でゆつくりレベルSの味を楽しめばいい」

俺はのりこを見た。目を閉じてるが、腰がクネクネ動いてる。
まだ酔いは覚めないだろう。

「わかりました」そういつて俺は、閉めてあるカーテンをぐぐり、
ベランダに出て窓を閉めた。

「出ましたよ、祐希さん。話って何ですか？」

俺は日の沈んだ黒い海を眺めながら言った。風が強くなってきた。

「もしもし？祐希さん？…もしもし？」

「……ああ、悪い悪い。聞こえてるよ」

「祐希さん、話って？」

「……ん？んん、まあ、あれだ。あれだよ、お前……」

「なんだよ。はっきり言ってくれよ、祐希さん」

「……ん〜。まあ、その、あれだよ……」

「は？何言ってるんだ、あんた？」

「……うん、あのな……英二、お前あれか？」

「オイ、祐希さん！何なんだよ！早く言えよ！」
何を言ってるやがるんだ、この野郎！

「……………うん、じゃあそろそろ……………」

「早く言えよこの野郎！言わないんなら、もう切るぜ？」

…力チャ。

後ろで音がした。

振り向くとガラス越しに、祐希さんがニヤけた顔で立っていた。

「祐希さん！どうやって入ったんだ！」

俺は、窓を開けようとするが、窓はピクリとも動かない。

祐希さんは、満面の笑みで鍵を指差した。

「か、か、鍵を開けろ、この野郎！祐希、テメー、どうやって入リやがった？」

「アハハハハハハ！甘いぜ、英二！テメーの負け、俺の勝ちだ！」

祐希さんは両手を挙げて見せた。

片手に一個ずつ、二個の携帯。

片方は、見慣れた祐希さんの携帯電話。
もう片方は…、あれは！

俺がさっき借りた、ゆうきの携帯だ。

…ど、どういうことだ？

「祐希さん、それはゆうきの携帯だな？」

祐希さんは頷いて、両手の携帯をそれぞれ両側の耳に当て、左右交互に口をパクパクさせ、話す振りをした。

祐希のうしろのベッドには、のりこがない。
のりこを目で探す。

…いた！

ドアとベッド、ちょうど中間くらいの床の上で、寝転びながら相変わらず腰をクネクネさせている。

…！！！！

そ、そうか！

俺がベランダで祐希さんと話しているそのとき、もう一方でのりこの携帯に電話して、のりこに鍵を開けさせた……！！

「テメー！ハメやがったな！」

「フツ、英二。なかなか頑張ったようだが、テメーの負けだ。アハハハハハハハ！」

「チ、チ、チクショウー！」俺はひざまずいた。

甘かったぜ！チクショウ！

サッカーでいうと、ロスタイムに入ってからの大逆転負けだ。
俺はベランダの床に、拳を突きつけた。

「しゃっ！！」

祐希さんは、薄ら笑いを浮かべながら、カーテンを閉めた。

俺は呆然と床に座りこみ、空を見上げた。

…星が綺麗だ。

やがて、きしむベッドの音が聞こえた。
俺は目をつぶって、首を振った。

そして、部屋の中から他の音…、いや、声も…。

ギシギシッ…

「あっ…ああん…、はあっ…」

ギシギシ…

「…んんっ！ダメ、あたし彼氏が…ああんっ！」

ギシギシギシッ！

「はああっ！いいわっ、いいっ！……い、い、いつ…ちゃう…」

ガタガタガタガタ！！

「あっあっあっ…！素敵…、…お願い…、…もっと、もっと…、お
願い…、はああっ！」

俺は空を見上げた。
星がにじんでいた。

「あの人にはかなわねえ…」

くオワリく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2231c/>

LOVE GAME

2010年10月17日02時23分発行